



マンガに見るサラリーマンのワークライフバランス

鈴木, 竜太

(Citation)

国民経済雑誌, 228(1):73-88

(Issue Date)

2024-03-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100487666>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100487666>



国民経済雑誌

THE
KOKUMIN-KEIZAI ZASSHI
(JOURNAL OF ECONOMICS & BUSINESS ADMINISTRATION)

マンガに見るサラリーマンの
ワークライフバランス

鈴木 竜 太

国民経済雑誌 第228巻 第1号 抜刷

2024年3月

神戸大学経済経営学会

マンガに見るサラリーマンの ワークライフバランス¹⁾

鈴木 竜 太^a

本論文は、サラリーマンマンガをはじめとするマンガをデータとして用い、日本人のワークライフバランスの変遷について分析する。ワークライフバランスにおけるワークは仕事、ライフは家庭といった枠組みで用いられることが多く、日本企業においては女性の労働や出産・育児、近年では介護といった文脈で考えられることが多いが、実際のワークとライフはそれぞれ多様であり、そのバランス関係も多様である。本論文ではマンガをデータとして用いて、多様性とその変遷を明らかにした。

キーワード ワークライフバランス，日本企業，マンガ

1 はじめに

本論文は、マンガというメディアでの描かれ方を通じて日本のサラリーマンのワークライフバランスの変遷を明らかにしようとするものである。

ワークライフバランスという言葉は現在多様に用いられるが、その概念には大きく2つの次元がある（Sirgy and Lee 2018）。それらは、仕事や仕事外の複数の役割への関与と仕事と仕事外の役割の間の最小限のコンフリクトである。このうち、前者は複数の役割をこなすことを意味し、それぞれの役割に十分に時間を費やすことができることや注意を払うこと、あるいは注力ができること、あるいはそれぞれの役割の成果に十分に満足できている状態、をワークライフバランスが保たれている状態としている。一方後者は、複数の役割間のコンフリクトが少ない状態を指す。これを踏まえれば、ワークライフバランス研究において、焦点をあてる点としては仕事と仕事外の役割の遂行に対する満足と仕事と仕事外の役割の間のコンフリクトということになる（Sirgy and Lee 2018）。これらワークライフバランスの研究は、アメリカでは1990年代後半に提唱されはじめ、2000年代になってから徐々に研究が増え、2021年をピークとして論文数が減少している。²⁾

a 神戸大学大学院経営学研究科, suzukir@kobe-u.ac.jp

本論文が焦点としている日本におけるワークライフバランスはどのようなものであったか。ワークライフバランスがタイトルとして用いられる日本語の論文は2006年ごろから登場し始める。政府が2007年に仕事と生活の調査（ワーク・ライフ・バランス³⁾憲章」と「仕事と生活の調和推進のための行動指針」を策定してからは、様々な論文や記事が掲載されるようになる。この背景には、少子高齢化や女性の社会進出といった日本の社会的な問題がある。内閣府が仕事と生活の調和が実現した社会の姿として、国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現する社会がうたわれている。具体的には①就労による経済的自立が可能な社会、②健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会、③多様な働き方・生き方が選択できる社会である。このように、ワークライフバランスとは、家事や育児などの家庭生活や地域生活と仕事をうまく調和させることが念頭に置かれている。つまり、趣味の時間や友人や恋人と遊ぶといった生活の部分は生活とは見なされていないことになる。これは先にあげたワークライフバランスの2つの次元を踏まえてみてもわかる。仕事での役割と仕事外の役割といったように「役割」に焦点が当てられる以上、それは要求されるものであり、遂行しなくてはならないものを遂行する際の調和（バランス）が図られるという前提が置かれている。

しかしながら、実際の日常の仕事生活の中では、ワークとライフの有り様は様々である。仕事のために自分の趣味に費やす時間が少なくなる、仕事が忙しいことから友人との人間関係が希薄になり仕事関係の友人しかいなくなる、反対に自分の趣味に時間を費やすために仕事を変えざるをえないといったことはワークとライフのバランスがうまく取れていないと見ることもできるはずである。本論文では、狭い意味でのワークライフバランスにとらわれず、マンガの分析を通じて多様なワークとライフを捉え、それらが時代とともにどの様に変遷してきているのかを明らかにする。

このような目的に際して、マンガをデータとして用いる理由は2つある。1つは本論文の目的である多様なワークとライフの姿をみることができるという点である。本論文で分析の俎上にあげるそれぞれの主人公は実在の人物でもなければ、その時代の平均的姿でもない。しかしながら、読者に共感を得ていることを踏まえれば、様々な現実にありうる姿あるいはありたい姿の総体として表現されていると考えることができる。そこで描写されるワークライフバランスのストーリーは、仕事と家庭といったような単純なワークとライフの理解だけではなく、様々なワークとライフの間の問題を取り上げてくれる可能性があり、ワークライフバランスの多様な文脈を考える上では新しい視点を与えてくれる。2つ目は、時代的な変遷を追いやすいということである。日本の従業員の過去からのワークライフバランスの変遷を理解するとき、インタビューやアンケートといった方法はデータのもつ制約上、データの

4)
収集や分析は難しくなる。

一方で、マンガを用いることによる難しさも生じる。一定期間連載が続いているマンガは、読者の共感を得られたマンガであるにとらえることができ、その点で何らかの読者の現実を反映したものであることは間違いない。一方で、その現実が、実際に様々なところでマンガのような状況を見かけることという意味での反映とは限らない。マンガであるがゆえに、本当はこうではないけどこうあったら良いというような期待がマンガに描かれているからこそ共感を得ている可能性もある。この点については明確に判断することはできないことから、解釈においては注意する必要がある。

2 サラリーマンマンガのデータと分析

本論文が注目するサラリーマンマンガには大きく2つの捉え方がある。1つは、サラリーマンが主役であり、主に仕事の場面や会社での場면을文脈として描かれるマンガである。つまり、サラリーマンとして仕事をしている姿が主題となるマンガである。もう1つはサラリーマンに読まれているマンガ、サラリーマンを読者対象としたマンガである。このうち本論文が念頭におくサラリーマンマンガはこの2つの捉え方の双方を含むものである。つまりサラリーマンが読者対象となるサラリーマンを主題としたマンガということになる。ただし後者の対象については実際は曖昧となる。また前者の点は、ストーリーマンガであっても風刺的な一コマあるいは四コママンガも含むことを意味する。

実際には、それぞれのマンガの主役には様々な意味合いが含まれる。例えば、多くのその当時のサラリーマンの心情や状況を反映したものであることもあれば、理想像や英雄像として描かれることもある。また揶揄やこっけいな姿として描かれたり、ダークヒーローのような姿として描かれることもある。この点について本論文では、同時代の複数のマンガの主人公を分析することによってその時代のサラリーマンのワークライフバランスについて検討することを試みる。

本論文で用いるマンガデータの発行年代は表1に示す通りである。本論文では戦後に絞っていることからおおそ1940年代からのマンガが対象となるが、実際のところサラリーマンが主人公のマンガは1970年代ごろから現れ始める。本来であれば全てのサラリーマンマンガを対象に分析することが必要とされるが、その量が膨大になることやサラリーマンが登場するものの主題は仕事ではないものなども様々ある。そのため、本論文ではいわゆるサラリーマンの仕事や働きぶりが描かれているものを真実(2010)を参考に選んだ。また日本人のサラリーマンの姿を(様々な)描写し、ある程度連載が続いたものを分析の対象としている。ただし、近年の作品については連載中のものも多く、また多様な作品があることから、代表的と思われるものをデータとして選んだ。

考察に用いたサラリーマンマンガは11編である。表からわかるように、1960年代から2020年代までのおよそ60年から選択した。サラリーマンマンガと言えば青年誌のイメージも強いが、実際は少年誌で掲載されたものもあり、近年では女性誌に掲載された作品もある。掲載年と登場人物の年齢から生年を推察すると、1920-30年代の戦前戦後世代、団塊の世代、バブル世代、氷河期世代、そしてゆとり世代が主人公のマンガを選んだこととなった。

表1 考察に用いたサラリーマンマンガの連載期間と主人公の生年他

タイトル	著者	掲載誌	主人公年齢	生年	連載開始	連載終了
フジ三太郎	サトウサンペイ	朝日新聞	32歳	1933年	1965	1991
ダメおやじ	古谷三敏	週間少年サンデー	40過ぎ (1巻より)	1920年代	1970	1982
釣りバカ日誌	やまさき十三・北見けんいち	ビッグコミックオリジナル	入社7年目	1950年	1979	—
課長島耕作	弘兼憲史	モーニング	1947年生まれ	1947年	1983	1992
いいひと。	高橋しん	ビッグコミックスピリッツ	新入社員	1970年	1993	1998
サラリーマン金太郎	本宮ひろ志	ヤングジャンプ	20代	1970年ごろ	1994	2002
サブリ	おかざき真里	FEEL YOUNG	27歳	1976年	2003	2009
働きマン	安野モヨコ	モーニング	28歳	1976年	2004	2008 (休載中)
ぼく、オタリーマン	よしたに	なし	29歳	1978年	2007	2011
午前3時の無法地帯	ねむようこ	FEEL YOUNG	新入社員	1985年	2008	2009
まじめな会社員	冬野梅子	コミック DAYS	30歳	1991年	2021	2023

分析としては（特に長期にわたる連載作品については）連載初中期のストーリーやキャラクターの分析を行っている。この理由としては2つの点があげられる。1つは、長期連載であっても主人公のキャラクターや考え方に大きな変化がないことが多く、それらは初期のころに概ね提示されていることがほとんどであることである。本論文では、主人公（並びにその周囲の登場人物）のワークとライフの関係について分析しようと試みている。これらのキャラクターはストーリーの進展とともに徐々に形成される点もあるが、初期や中期において形成される特性をもっていると考えられるからである。反対に言えば、初中期の段階において主要な登場人物のキャラクターが固まっておらず、安定しないことにはマンガそのものの質として高いものになりにくいことが考えられ、結果として本論文が取り上げる（認知度が高い）マンガにおいては、初期（あるいは中期）までにある程度固定的なキャラクターが形成されていると考えることができるからである。また、初中期に性格づけができていたとはいえ、連載マンガにおいて初期は硬派であった作品が、後半になるとギャグマンガの様相を持つストーリーや初期の設定がぐちゃぐちゃになっていくこともある。これは連載の中で

ストーリーやキャラクターが読者に受けるように変容しているからとも考えられる。もちろん変容した後のキャラクターに注目することも考えられるが、本論文では、時代性を分析することから一旦人気を確立した段階の初中期のストーリーやキャラクターに主に注目して分析を行う。

3 マンガから見るサラリーマンのワークライフバランス

この節からは実際のマンガデータをもとにサラリーマンマンガのワークライフバランスに注目して分析をする。より実際的には、仕事以外の側面のどのような役割にエネルギーや関心を持っているか、加えて仕事と仕事外のそれぞれの役割の間にどのようなコンフリクトを抱えているかということに注目する。

3.1 気楽なサラリーマンと父親の地位

この節では、1970年前後に連載が開始された2つのサラリーマンマンガを取り上げる。ただし、この時代はサラリーマンマンガがまだ確立していない時期であり、ここで取り上げる「フジ三太郎」は新聞、「ダメおやじ」は少年誌に掲載されていた。

「フジ三太郎」は、1965年に「朝日新聞」の夕刊に四コママンガとして登場し、その後1991年まで掲載が続いたサトウサンペイによるマンガである。フジ三太郎は万年ヒラのサラリーマンであり、新聞マンガらしく三太郎の家庭や会社で起こる悲喜交々や社会風刺や時事ネタをユーモラスに書いた作品である。フジ三太郎の設定は32才、子供が1人と妻がいる。社会風刺が多いため、「フジ三太郎」ではあまり会社や仕事の様子が直接的に描かれることは少ないが、1つの悲哀としてボーナスや給与などが少ないことが揶揄的に表現されることは少なくない。ライフについては、ゴルフや家族旅行などの描写が時々示されるが、父親としての役割などについてはそれほど多く描かれない。またワークについては、決してモーレツに働くわけではなく、日々のサラリーマン生活を楽しむような姿が描かれる。ワークとライフの葛藤についても、それほど描かれることはなく、妻が給与やボーナスの安さを嘆くことや父親らしい仕事をしないことをなじるような描写もない。その点では、ライフの部分はそれほどなく、ワークとライフの葛藤もそれゆえ示されることがほとんどない。自由に遊ぶことだけが制限されているというような状態は描かれるが、それについて対立が示されることもなく、そういうものだという描かれ方である。

「ダメおやじ」は古屋正敏によるギャグマンガであり、1970年より1980年まで少年誌に掲載された。その点では、サラリーマンが読むマンガというよりは、まだ働いていない年代が読むマンガであり、本論文の射程からは外れるが、この時期におけるサラリーマンマンガの数が少ないことから参考として取り上げることとしたい。「ダメおやじ」の主人公、雨野ダ

メ助は連載当初の年齢が40才過ぎであり、連載年から考えると1920年代生まれ、戦前戦中の生まれということになる。雨野はタイトル通り、仕事ができないだけでなく、会社のお金をギャンブル（競輪）につき込んでしまうようなダメなサラリーマンである。家庭においても、家族からもダメ親父扱いであり、妻のシリに敷かれて家庭での役割もほとんどいじめられるような役である。1巻の途中では、先のギャンブルの件もあり、誰も同僚がいない北海道に一人転勤させられてしまう。家族はその後3ヶ月連絡がないにもかかわらず、「きつとのだれ死したんだろう」「クマに食われたんだよ」と見捨てるような発言をする。会社でもいじめられ、家庭でもオニババと呼ぶ妻からの虐待を受ける雨野の願いは家庭が平和であることというよりも、自身が平和で安全であるのかという点であり、その点では家族の一員としての役割はほとんど見出されていない。

「フジ三太郎」と「ダメおやじ」においては、ワークとは会社での上司との関係であり、仕事そのものについての描写はほとんどなく、サラリーマンはまさに会社の中で仕事をすることで給与をもらう存在であり、気楽に過ごしている存在である。一方で、ライフの側面である家庭についてはその役割はあまり示されてはおらず、「ダメおやじ」に至っては家族の一員⁵⁾としても認められてない状態である。

3.2 立身出世とワークライフバランス

この節では、高度経済成長期からバブル期にかけて連載されたサラリーマンマンガをみていくことにする。ここで取り上げるマンガは「課長島耕作」と「釣りバカ日誌」である。釣りバカ日誌は、1979年に連載開始され島耕作は1980年代に入ってから連載が始まっている。釣りバカ日誌も島耕作シリーズも現在も続いているマンガである。まず、課長島耕作は、サラリーマンマンガと言えば「島耕作」と多くの人が思いつくように、サラリーマンマンガの嚆矢であり、金字塔であろう。1983年に青年誌である「モーニング」（講談社）に連載が始まった「課長島耕作」は、その後主人公の島耕作が昇進するにつれ、「部長島耕作」「取締役島耕作」「常務島耕作」「専務島耕作」「社長島耕作」「会長島耕作」「相談役島耕作」とタイトルを変えつつ長期間連載が続いている。ここでは、サラリーマンのワークライフバランスの変遷をとらえることから「課長島耕作」を中心に考察していくことにする。

主人公の島耕作は1947年生まれであり、いわゆる団塊の世代である。島耕作以降、サラリーマンを主題としたマンガが認知され、多くのサラリーマンマンガが誕生するが、それ以前に始まっている「釣りバカ日誌」の主人公浜崎伝助も1947年生まれであり、いわゆる団塊世代と呼ばれる世代に2人は含まれる。

「課長島耕作」はタイトルにあるように勤める大手電器メーカー初芝電器の課長に着任するところからストーリーがはじまる。仕事は営業職であり、島耕作自身は「34才の課長なら

同期の連中と比肩しても早い方だ……悪くない」というように、順調に出世をしており、その出世や評価について島耕作自身も重要なことであると考えていることがわかる。その中で、社内のスパイを探すうちに会社の中の派閥争いに巻き込まれ、下っ端としてその争いに加担し相手を貶めるのに成功する。そのことは彼の評価になるが、その見返りとして出世街道であるNYへの転勤の話が持ち上がる。島としては家族でNYへ行くことは家族も喜んでくれると思ったが、娘の入試やNYに興味がない妻からは反対される。また、その日がクリスマスイブであったことから、早く帰ってこないことを詰められる。1巻の前半では、家庭での生活や父親としての役割を意識させるような描写もあったが、これ以降、家庭での父親としての役割はほとんど描写され⁷⁾ない。ここでは仕事の側面のほとんどは会社の事情であり、それにより父親としての役割を果たせないことからコンフリクトが生じている。ここで描かれるワークとライフの関係は、会社に巻き込まれるようになり、その結果（自身の野心としての）出世や昇進と父親や夫といった家庭人との役割の間の関係であり、その間のコンフリクトであると見ることができる。島とすると家族でNYへ行くことができれば、両方の役割を引き続き果たしつつ、コンフリクトが軽減されたと考えたが、結果的には家族に反対され、島はワークを取り、単身赴任でNYへ行くことになる。

一方、「釣りバカ日誌」の浜崎伝助は、鈴木建設の営業第3課に勤めるサラリーマンである。彼が上司である佐々木課長に釣りに誘われるところから物語は始まる。浜崎は連載当初、結婚してお腹に赤ちゃんがいる妻と二人暮らしであるが、趣味がなくゴロゴロと週末を過ごしていた。妻はゴルフなどの趣味を持つことで、社内の付き合いが生まれ、出世できるのではないかと期待をしているため、課長からの釣りの誘いを喜ぶ。しかし、その時の釣りがきっかけで釣りにハマリ、釣り具を次々に購入し、休みの日も育児をせず釣りに出かける夫に徐々に呆れ始めることになる。とはいえ、課長と釣りに出かけることで、出世につながっていると考えている妻は父親の役割を果たさない浜崎に不満を持ちながらも我慢する。

浜崎は決して仕事ができないキャラクターとしては描かれていない。問題を起こすことはあるものの、周囲からの信頼や仕事の評価も決して低くなく昇進の話も何度か出るほどである。しかしストーリーの中では浜崎はその昇進の申し出を断っている。もちろんそれは今や趣味となった釣りに支障が生まれてしまうからである。一方で、妻は出世を望んでいるが、それは給与が上がり豊かな生活につながるからに他ならない。浜崎にとっても仕事そのものの面白さが描かれることは少なく、ワークとライフの関係性で描かれるワークは出世や昇進を含む会社の処遇である。ワークとライフのコンフリクトも、会社での昇進は妻も望んでいるし、それによって豊かに家族と暮らせることになるが、その結果趣味の釣りの時間がなくなるというコンフリクトである。これを踏まえれば、浜崎におけるワークとライフのコンフリクトは、妻を愛する浜崎は、会社を介して妻の希望を叶えたいという夫としての役割と自

身の趣味としてのライフの間のコンフリクトであると考えることができる。

上記のように島と浜崎のワークとライフは分析できるものの、両者においてはそれほど深くこのコンフリクトに悩んでいる様子はないことは共通している。島は妻からの反対がありながらもワークを特段悩みもせずを選択し、浜崎は昇進を断り続けている。この点では（異なるものを選択しつつも）両者は上手に複数の役割を果たしているとは言えず、さらには大きなコンフリクトを抱えてはいないということになる。

3.3 重なるワークとライフ

バブル期から氷河期が始まるころに連載がスタートしたのが「いいひと。」と「サラリーマン金太郎」である。ここではこの2つのマンガを通して、バブル期以降のワークとライフのバランスについて考察していく。「サラリーマン金太郎」の主人公である矢島金太郎（以下金太郎）は入社までの経緯が明確ではないが、おおよそ1970年代の生まれであり、「いいひと。」の主人公である北野優二（以降北野）とはほぼ同世代の入社である。2つのストーリーの特徴は、いずれも組織のこれまでの常識とは異なる価値観を持ち込み、既存の組織や組織のメンバーを変えていく主人公のストーリーである点である。金太郎はストーリー上、会社の中でも出世を遂げていくが、北野のストーリーはほぼ新人・若手時代のものである。

「いいひと。」の北野は北海道出身であり、スポーツシューズを製造販売するライテックスの入社試験に東京へやってくるところから物語は始まる。北野は道中困っている人を助けたことから、入社面接にもかかわらず遅刻してしまう。しかしながら北野はそのことに全く焦りはなく、会社や仕事よりも困っている人を助けることが優先であることに疑問を持たない。その役員面接では「私の周りの人の幸せが、私自身の幸せ」と述べ、人を幸せにすることが会社の利益にもつながると述べる。北野にとってのワークは会社というよりも自分の夢（多くの人を幸せにする）を実現するためのものであり、周り（特に上層部）との軋轢をうみながらも自己の夢を実現するために仕事をしていき、結果的に周りの人々の考え方や価値観を変えていく。

北野は若い社員であることからライフとしての家庭はない。しかしながら、同僚や上司の家族と向き合うシーンが「いいひと。」には多く描かれる。たとえば、ライテックスの人事部長の娘は、夫もかつてライテックスに勤めていたが、仕事に熱心であったことから早くに亡くしていた。彼女は、夫は会社で殺されたと考えていた。しかし幸せのためにシューズを売る北野と接することで、夫はワークによってライフを奪われたという認識を持っていたのが、ワークを通じて周りに幸せを届けていたのだと父の勤める会社でもあるライテックスを見直すようになる。このように、北野にとってはライフとして周囲を幸せにするという役割と仕事における役割が同一線上にあり、見た目には役割は1つであり、コンフリクトがそこ

には存在しない。学生時代からのガールフレンドとは遠距離恋愛であるが、彼女も北野のそのような考えを理解し、(表面的には)仕事ばかりでライフの役割をしない北野に対し明確なコンフリクトを示すことはない。

同じような構図は「サラリーマン金太郎」の金太郎にも言える。金太郎は島耕作と同様に、豊富な人脈を持つサラリーマンとして描かれ、その人脈は偶然と金太郎の人柄や異質な才能によってもたらされている。もともと暴走族グループの伝説的なヘッドであるという背景を持ち、ひょんなことからヤマト建設の社長に恩を売り、気に入られることで入社し、その後も多くの人脈を仕事の中で得ていくことになる。しかし、島耕作が積極的に自身の持つ人脈を仕事に活かそうとするのに対し、金太郎はその人脈を利用することを心良しとはしない(それゆえさらに支援者の輪が広がっていく)。金太郎にとっての仕事は自分の可能性を試すことであり、他者の力を用いることで自分の力以上の力で自分の志を成し遂げることや自分の身の丈以上のより大きな権力や高い地位を得ることを金太郎は拒む。その点で金太郎にとってのワークは自己実現や自分の能力を試す場であり、北野と同様に自分のライフがワークと重なり合っている。また(その性役割はステレオタイプ的であるが)父親あるいは夫としての役割を果たそうとするシーンも多く登場するが、そこにコンフリクトはあまり描かれない。

2つの作品は自分の働きがいや志、何のために働いているのかといったことが問われるシーンが多い。これはバブル期が終わり、終身雇用や年功序列といった一つの会社で地位をあげキャリアを全うするという価値観が崩れていた時代背景も大きいであろう。ワークライフバランスの文脈で言えば、ここでのワークは会社ではなく仕事であり、島耕作や浜崎伝助が自らの人脈や周囲の人の助けによって様々なトラブルを解決するのに対し、北野や金太郎は人脈とともに自身のビジネスのアイデアによって解決をされるようになる。これ以後、仕事にフォーカスした「仕事マンガ」が増え、会社の中での生活を描くようなサラリーマンマンガがあまり登場しなくなる。これらの点は、この時代の2つの作品がこれまでのサラリーマンマンガとの転換点にあるマンガとみることもできる。

3.4 女性におけるワークとライフの葛藤

「いいひと。」「サラリーマン金太郎」から10年後に、「働きマン (2004年連載開始)」「サブリ (2003年連載開始)」がスタートする。いずれも女性が主人公であり、「働きマン」の主人公松方弘子(以降松方)は連載開始時に28才、サブリの主人公藤井ミナミ(以降藤井⁸⁾)は連載開始時に27才のほぼ同年代である。2003-4年の27-28才はまさに就職氷河期世代の世代となる。

働きマン、サブリのサラリーマンマンガとしての特徴の1つは主人公が女性であること、

そしてそれぞれ仕事内容にフォーカスを当てたマンガであること、があげられる。働きマンは島耕作や宮本から君へと同じ「モーニング」誌に連載されたが、サプリはヤング女性向けの「Feel Young」誌（祥伝社）に連載されている。また雑誌編集と広告代理店というように、業種は様々であったが、多くのサラリーマンマンガにおいて定番の営業職ではないことも特徴や変化と言える。

「働きマン」の松方は雑誌編集者であり、いわゆる仕事人間である。ただし、マンガの中では生活の部分も描かれ、恋人とデートの約束をしたり、時には結婚などの話題も出る。雑誌編集という仕事柄、締め切りに追われ、突発的なトラブルも多く、当然ながら残業や休日出勤も増える。決してライフの部分が不要だとは思っていないが、基本的には仕事が大好きで、仕事が自分の生活の中心にあり、仕事の達成が喜びである。タイトルでもある「働きマン」とは、彼女が仕事モードに入る時の言葉であり、結婚とか恋愛とかといった仕事外の部分（寝食恋愛衣食衛生）は一切切り落とされるが、その代わりに爆発的な集中力を見せ仕事をやり遂げる。その意味では、彼女は当時の女性らしい働き方と男性的な働き方の端境に位置していると言えるし、いわゆるワークライフバランスを意識した働き方だが、ワークがライフを色々な意味で浸食していく姿がストーリー上は描かれる。まさしくワークライフバランスの観点からいえば、ワークを優先し、「働きマン」になることでコンフリクトを生じなくさせている。

確かに松方は仕事人間ではあるが、長期的なキャリアについては自分がどうなるのか、どうなりたいのかという点については不明瞭で、ストーリーの中でも揺れ動く姿が描かれる。ストーリーは松方の奮闘が描かれると同時に、仕事人として生きるか妻として生活を大事にして生きるかというキャリアの分岐点での悩みが描かれる。例えば、若い女性編集者が自分の可愛さを利用して仕事を進めていることに対して、松方は当初一種の嫌悪感を覚える。またそういう評価をする周囲の男性に対しても厳しく抗議をする。ただその若い女性編集者は記者として「セクハラ？ そんなの別に気にしません、女で仕事もらえるならそれでいいじゃないですか、そういうの否定しているって不自然でみにくいと思う」と述べる。また自分の仕事への協力を彼女がしなかったことに対し、女性的な嫉妬だと捉え、悪感情を芽生えさせる。しかし実際に彼女は男性と同じように働くのではなく、女性らしく男性記者や編集者にはできない気を遣うようにすることで、周囲に認められ仕事を成し遂げていたことがわかる。そしてこの女性編集者はその後結婚する。彼女は男性と同等に張り合うのではなく、女性という特性を活かすことで男性にできないアプローチで仕事をし、花嫁になるという女性のもつ一つの夢をも得ていくのである。男性と同様にそして対等に働くことを考えている松方は、彼女を認めつつも自分はそうではない道、仕事でやりたい自分を実現していく道を選んでいく。

「サブリ」の藤井も松方と同様の境遇、つまりは仕事の充実感と生活の充足感の双方の葛藤の中で働いているが、松方よりも仕事人間になりきれていない姿が描かれる。また長期的なキャリアについては、どちらかといえば素敵な結婚をするといういわゆる社会における女性の性役割に準じた姿を肯定しているところもある。ただストーリーにおいて藤井は広告代理店の仕事が好きではあるが、仕事が忙しくなるにつれ生活が荒んでいくこと（自室が散らかったままであったり、恋人との関係がうまくいかなかったりすること）に抵抗しつつも、ライフでの役割を諦めていく。働きマンではあまり同僚女性の姿が描かれませんが、サブリでは同僚の女性の姿が多く描かれ、藤井も先輩や他の業種で働く女性との対話や一緒に仕事をする中で仕事へのプライドや仕事へ打ち込むことへの肯定的な感情を強くしていく。当初、自分の先輩格に当たる40代の仕事人間の女性（ヒラノさん）に対して「私はああはなりたくない」と述べているが、この女性に対して、男性同僚が「ああはなりたくないなあ」と述べることに対しては強く反発する。また後には、デートの約束を仕事のために断る藤井に対し、すぐに次の（デートの）約束をしないとアドバイスし、そうしないと自分になるわよと言うヒラノさんに対して「カッコいいと思います、女として憧れます」というように肯定的な感情を持つようになる。ただし一方で、仕事一辺倒になることへの恐れも藤井は抱いている。自分が仕事を始めたころに思った、女性の仕事人の姿に対する怖さや「ああはなりたくない」と感じた感情を若い人が自分に対して思っていることを自覚し、「若かったときの自分の視線が一番痛い」とも言う。仕事ができる女性、プロフェッショナルな女性への憧れとそれを選べば（いわゆる）普通の幸せを失うのではないかと感じているのである。

松方と藤井のいずれも女性が仕事をする際に感じるワークとライフの葛藤の中にいる。その葛藤こそがストーリーの中心に置かれていると言っても良い。ただし松方も藤井も結婚をしているわけではない。キャリアが進むにつれ、責任ある仕事を任され、その喜びを感じるとともに、若いときに描いた将来の自分の姿や家族など周囲が望む姿からの乖離に悩まされるというコンフリクトである。また、おしゃれや恋愛に時間を割けないことも仕事と生活の葛藤として描かれる。この点はサブリの藤井の方が強く、働きマンの松方は仕事人になれば、生活での充足感は得られにくいことにある程度の折り合いをつけて描かれている。ワークとライフの葛藤において、（結婚をしてはいないものの）いずれの主人公にとっても生活に（将来の）家族や家庭生活がある。そしてワークとライフの葛藤とは仕事と家族の葛藤であると同時に、どちらかを犠牲にしなくてはならないといったこれまでの主人公とは異なる葛藤を抱えていると見ることができる。

ただしこれは女性が主人公であることが理由であるのか、あるいは時代性によるものであるのかはわかりにくい。もう一つの特徴的な点は、男性女性を問わず、様々な仕事に対する考え方を持つ人々が描写されている点である。島耕作の今野課長や釣りバカ日誌の佐々木課

長、サラリーマン金太郎の鷹司など、主人公と異なる仕事や会社に対する考えを持つ登場人物は各作品において登場する。しかしいずれもが主人公に対して前近代的な考えを示す登場人物であり、主人公の考えをより先鋭的にするための存在であった。またそれ以外の登場人物はほとんどその価値観などは示されない存在であった。一方、働きマンやサブリで描かれるその他の人物では、様々な仕事に対する考えを持つ人々が登場する。例えば、働きマンでは仕事に対していい加減なフリーランスのライターや先にあげた仕事も結婚もこなす若い女性編集者などが登場し、主人公の仕事への考え方に影響を与えていく。一方、サブリでもヒラノさんや仕事で出会うプロフェッショナルな女性、仕事よりも楽しく生きることを大事にする男性などが登場する。この点では、サラリーマンはこういう人たち、女性で仕事をする人はこういう人というステレオタイプな見方から、様々な仕事に対する考えをもつ多様な人々が働いている姿が描かれていることも特徴的な点であろう。3つ目の特徴として、2つの漫画では仕事と自分の人生という点にフォーカスされ、会社が自分に何を与えてくれるのかあるいは会社とはいったいどのような存在であるのかという点はほぼ描写されない。「サラリーマン金太郎」や「いいひと。」では多く述べられていたことと比較しても大きな違いであるといえる。

3.5 ささやかなワークとライフのバランス

最後に、2000年代後半から現在のマンガについて触れていく。取り上げるマンガは「ぼく、オタリーマン」「午前3時の無法地帯」「普通の会社員」の3つである。ここで取り上げるマンガの特徴の1つはその業種と企業の規模である。「午前3時の無法地帯」は小さなデザイン事務所が舞台となり、「ぼく、オタリーマン」はIT業界のシステムエンジニアが主人公の職種であり、「普通の会社員」の主人公は派遣社員である。またもう1つの特徴として、取り上げられるストーリーにおける深刻さの小ささである。以下で述べていく様に、取り上げるマンガは、いわゆる大企業が舞台ではなく、残業が多いことや給与がそれほど高くはないことなど恵まれた環境での仕事ではない。また「働きマン」や「サラリーマン金太郎」にみられる様な仕事そのものの華やかさもない。ストーリーとしては、悲壮感や大きな達成感に溢れたものとはいえず、むしろその中でのささやかな喜びや満足が描かれる。

2007年に連載がスタートした「ぼく、オタリーマン」はIT企業に勤めるよしたにが主人公の漫画である。漫画雑誌に連載した漫画ではなく、ブログで著者が発表していた漫画がコミック化された漫画であり、この点もこれまでの漫画雑誌→コミックという従来の路線とは異なる形で生まれた漫画である。漫画は著者自身の経験に基づくものであり、いわゆる日常を赤裸々に描いた漫画である。その点ではフィクションというより（多少の脚色はあるものの）ノンフィクションに近い漫画であり、大きなストーリーはない。よしたにはいわゆるオ

タクであり、漫画やアニメ、ゲームが好きなサラリーマンである。飲み会などは苦手な恋愛などの描写も少ない。コミックの最初に描かれるように「この本は、僕が仕事や恋愛や友情やそういったものにちょっとずつ挫折していく過程を描いた日記漫画」である。よしたには仕事への強い情熱はそれほどない。決して仕事ができないわけではないが、仕事に燃えて次々と成果を上げていくというわけでもない。仕事に関しては、仕事への内容というよりも仕事における様々な小さなトラブルや職場の人間関係が多く描写される。またそれらの描写は仕事以外の生活の部分とも重なり合って描かれる。例えば、よしたには年始に有給休暇をもらうために上司に申し出る。しかしその有給休暇をもらう代わりに年末12月30日、31日も出勤するように言われてしまう。また、年末年始も風邪をひき、体調不良の中仕事を行うが、彼にとって悲しいのは風邪をひいて辛い中、休日出勤をすることだけでなく、年末年始に何も予定がないということであることが描かれる。このように日常が淡々と描かれる中で、健康や結婚についての不安も描かれていく。ここでは出世への心配やワークとライフの葛藤などはほとんど感じられない。また仕事がうまくいかない、仕事人として成長しないということも描かれない。むしろライフに何も起きないことこそがよしたにを時に悩ませる。まさに日常を淡々と過ごす姿が描かれている。

2008年に連載がはじまった「午前3時の無法地帯」は小さなデザイン事務所に就職した新人、七瀬ももこの仕事と恋愛が描かれた漫画である。サブリと同じFEEL YOUNG 誌に掲載された。主人公の七瀬はイラストレーターの専門学校を出たが、望む仕事ができるデザイン事務所ではなくパチンコ専門のデザイン事務所に就職する。ここでは仕事で徹夜になることは当たり前で、女性だろうが男性だろうが仕事を全うすることが求められる。七瀬はイラストレーターとして働くことを希望していたため、パチンコのデザインという仕事に対して幻滅をしていた。また、その働き方についてもいわゆるリアリティショックを受けていた。七瀬からすれば、くだらない仕事を夜遅くまでやっているという印象であったのである。しかし、仕事をしていく中で早々にそのような仕事や職場への不信感は減り、仕事や職場に徐々に適応していく。その背景には、いい加減に仕事をしているようで、しっかりそれぞれが自分の仕事をこなしていることがある。七瀬は皆がそれほど仕事に対して熱意を持っていないと思い、仕事が雑になってしまう。その際にひどく叱られると同時に、同僚と上司に「仕事なめんなよ」と言われてしまう。もちろん七瀬自身は自覚的に仕事の手を抜いていたわけではないが、飄々と仕事をしながらも仕事に対して誠実である先輩や同僚の姿に感化されていく。ただし、仕事や職場には慣れていくものの、徹夜は当たり前になり、おしゃれなどにかまっていられなくなることから「女子力」が落ちていく。七瀬にとってのワークとライフの葛藤は、仕事を頑張ることで女子力がどんどん落ちていくことであるが、七瀬自身はその葛藤を自覚していない。折に触れて友人などに指摘されることで気づくことになる。

また、「午前3時の無法地帯」では転職や離職の描写が多い。七瀬自身も辞職願を上司に預けたり、自分との年代が近い女子社員が辞めるのを見て自分の辞めどころを考えたりしている。また、信頼していた先輩女子社員が、こっそり税理士の資格を取り、転職することにショックを受けてもいる。今の仕事にいっぱいであるが、将来の不安についても考える姿が描かれる。ただし、働きマンやサブリのように華やかに活躍することは描かれず、目の前の仕事を着実にこなし、新しい恋人との関係も構築されることが一つの成功として描かれ、新しく入ってきた社員に反対に「仕事なめんなよ」と言うようになる。

最後に、コロナ禍を舞台に描かれた「まじめな会社員」を取り上げることにする。冬野梅子による「まじめな会社員」は、2021年より講談社のWEBマンガ雑誌であるコミック DAYS で連載が開始された。主人公の菊池あみ子（以降あみ子）は30歳で契約社員として働く。仕事の場面はそれほど詳しく描かれていないが、オンラインショップを開くアプリの問い合わせ対応の仕事をしている。彼女の仕事への基本理念は「早く正確、無心で集中、定時上がり」である。仕事については、「こういう仕事ってなんでか『やりがいのない仕事』と思われがちだけど、そこがいいって人もいるのになんてわかってないよ、世のCEOは」と述べている様に、仕事そのものにやりがいを求めているわけではない。会社の中では、できる限りストレスを溜めない様に自分の本音はあまり出さず、あえて異質な存在を演じようとしている。一方で、ライフについては、「ぼく、オタリーマン」と同様に結婚や出産といったことに意識がないわけではないが、それを意識するのを嫌い、読書会やライブなどに行くなど気楽な日常を楽しもうとしている。マンガではそんな中コロナ禍に入り、読書会やライブなどに行けなくなる中、少しずつ今の生活と将来について考える様になる姿を描いている。

あみ子にとってワークはそれほど大事なものではなかったが、徐々に自分のやりたいこととは何かということを考える様になり、その中でブログのライターなどの副業も始めている。また結婚がなかなか見えない中、経済的な自立を大事と考え始める。彼女にとってワークとは経済的な自立につながるものでありながら、それと同時に働きがいや自分らしさといったものでもある。一方でライフにおいては結婚を色々な場面で意識させられてしまうが、その可能性が減っていく中、悩む様になる。役割という観点から見れば、ワークでもライフでも役割というものが見えず、それゆえコンフリクトもない。そしてそのコンフリクトがないことに徐々に悩んでいるとみることもできる。

ここで取り上げてきたマンガにおいては、描かれるワークとライフはこれまでのマンガと比べるといずれもささやかな役割のものである。その点では役割と役割の間のコンフリクトもあまり発生しない。むしろ、親などの結婚の圧力など、役割を早く得ることへの不安や焦りが描かれる。仕事においても、やりがいや働きがい、責任といったことがそれほど求めら

れないことから、いずれの主人公も重い役割があるわけではない。またそのことに危機感をもっているわけでもない。気楽にワークとライフを楽しむという姿勢から、ワークとライフの役割を避けていった結果、いずれもささやかなものとなり、ワークとライフのバランスが保たれているという状態である。

4 お わ り に

フジ三太郎やダメ親父では、それぞれ妻との関係に配慮する夫としての姿が描かれるが、基本的にワーク（ここでのワークは会社）とライフは別のものとして描かれ、それぞれがそれぞれに影響する姿は描かれない。主人公はワークにも悩むし、ライフにも悩むがその間にはそれほど密接な関係は描かれない。しかし島耕作、浜崎伝助ではワークとライフは緩やかに相互に影響し合うことが描かれる。浜崎の妻のミチ子さんが出世（による給料の増加）を期待して上司との釣りに協力的であることや島耕作で描かれる仕事に没頭するにつれて妻との関係の冷却などがその例である。ただし、浜崎伝助が終始スーさんこと鈴木社長との関係の中で「公私混同」しないことを言っているようにその関係性は強くない。金太郎と北野でもワークとライフ（ここでのワークは組織ではなく仕事の側面が強い）の葛藤が描かれるが、2人とも基本的にはワークよりもライフを優先する。ただし、先に述べたように、この2人は仕事を通して自分のライフの目的を達成しようと考えている点ではライフとワークは同一視されるものになり、ここでのライフは自分ではなく家族や恋人との関係である。働きマンの松方やサプリの藤井の時代になると、女性ということもあり、仕事としてのワークとライフの葛藤はより強く描かれることになる。この中では仕事へのやりがいということが強く意識されることにより、そのためにライフとしての交際やその先にある結婚が犠牲（遠のくこと）になるという点がコンフリクトとして強調されている。一方、2010年代になるとワークとライフの葛藤は確かに描かれるが、これまでのマンガにおけるワークが会社での栄達や仕事のやりがいといった点、ライフとして家族としての役割や結婚や出産に置かれていたのに対し、ささやかな仕事の満足感とささやかな日常の幸せとの間の葛藤について描かれるようになる。そこではワークとライフの葛藤は具体的には存在していない。ただし一方で「まじめな会社員」でみられる様にコンフリクトがないことに悩むという姿もみられる。

改めて変遷としてここで見られるのは、ライフとして描かれていた家族や妻といった点が趣味やささやかな幸せへと変わっていくこととその一方で葛藤がなかった時代から葛藤の時代、そして再び葛藤なきことへの悩みといったものである。ただしここで描かれるのは、「はじめに」でも述べたように、今の読者や作者の周りの世界をそのまま反映していると理解することもできるし、まだそうなってはいないが期待やありたい姿が反映されていると考えられることもできる。その点ではリアルタイムとしての変遷とは言うことができないが、何ら

かの現実を反映したその変遷ととらえることはできるはずである。

注

- 1) 本論文は神戸大学 DP シリーズ「サラリーマンマンガから見る日本人サラリーマンの働き方の変遷」をもとに主にワークライフバランスに着目し、加筆改変したものである。
- 2) Web of Science による論文数の検索の結果より。検索では Work life balance の 3 つの単語による検索を行っている。
- 3) 引用ママ。本論文では基本的にワークライフバランスと表記する。
- 4) たとえばインタビューではどうしても回顧的なものとなり、当時どのように考えていたのかという点については現在の自分の解釈になってしまう。またワークライフバランスといった言葉が一般的ではなかった時期のワークライフバランスに関するデータは見つけるのが難しい。
- 5) 著者である古屋によるインタビューでは当時徐々に家族の中で父親の威厳のようなものが減退しているを感じていたことから、極端に威厳がない主人公を設定してみたとのことである。(ハーバード・ビジネス・オンライン, 2017年, 『『ダメおやじ』と高度経済成長期の狂気』より)
- 6) ストーリーの途中では、社内のスパイを探す中で「会社へのロイヤルティも大事だが…私自身の人事考課もより大切だ」と話している。
- 7) 結果として、島耕作は妻と離婚をすることになる。また、その後生まれた別の女性との間の娘との関係において父性を示すシーンが多く描かれることになる。
- 8) ただいずれの作品でも就職に苦労したという点は描かれない。
- 9) よしたには東京で一人暮らしをしているが、実家の母親から結婚の話などを聞かれることがつらいことが時々描写される。

参 考 文 献

- Sirgy, M. J., and Lee, D.-J. (2018). "Work-Life Balance: an Integrative Review." *Applied Research in Quality of Life*, 13(1), 229-254.
- 真実一郎, (2010). 『サラリーマン漫画の戦後史』, 洋泉社.